

## 文法 第1課

### 1 XはYです (p. 41)

「私は学生です」「私の専門は日本語です」「いま十二時三十分です」といった文は、日本語ではすべて、名詞と「です」という言葉で表すことができます。

～です

学生です。

日本語です。

十二時半です。

上の3つの文では、英語の文で見られるような I, my major, it のような主語がないことに注意してください。日本語では、主語のない文というのは普通です。日本語の話者は、実際のところ、何について話しているのかが聞き手にわかるようであれば、できる限り主語を省略して話す傾向があります。

もし、話の背景や文脈などでは何について述べているかはっきりしない場合は、「は」(wa) という語を付けた主題 (トピック) で文を始めることができます。この「は」(wa) は、ひらがなで書く時には「は」(ha) の文字を使いますが、これは文語の正書法の名残りです。<sup>1</sup>

XはYです。

専攻は日本語です。

私はソラ・キムです。

山下さんは先生です。

メアリーさんはアメリカ人です。

「は」は助詞と呼ばれる語の1つです。「の」という語もそうです。「の」については、この課の後ろのほうで説明します。日本語では、名詞句の後に助詞を付けて、その名詞句がその文の他の部分とどういう関係にあるかを示します。

上の例の「学生」や「先生」のような名詞は、その英語訳である student や teacher が不定冠詞の a と一緒に用いられるのと違って、単独で用いられていることに注意してください。日本語には不定冠詞の a に相当するものはありません。また、名詞の最後に複数の s を付けるということもありません。ですから、文脈がないと、「学生です」というような文は、1人の学生についてなのか複数の学生についてなのか曖昧になります。

## 2 疑問文 Question Sentences (p. 42)

文の最後に「か」を付けて疑問にすることができます。

留学生です。                      留学生ですか。<sup>2</sup>

上の「留学生ですか」という文は yes/no 疑問文と呼ばれます。「何」<sup>3</sup>のような疑問詞を含む疑問文もあります。この課では、「何時」「何歳」「何年生」「何番」という疑問詞を含む疑問文を使って聞いたり答えたりすることを学びます。

A : 専攻は何ですか。	B : (専攻は) <u>英語</u> です。
A : 今 <u>何時</u> ですか。	B : (今) <u>九時</u> です。
A : メアリーさんは <u>何歳</u> ですか。	B : <u>十九歳</u> です。
A : <u>何年生</u> ですか。	B : <u>二年生</u> です。
A : 電話番号は <u>何番</u> ですか。	B : <u>867-5309</u> です。

## 3 名詞 1 の名詞 2 Noun1 の Noun2 (p. 43)

「の」は 2 つの名詞をつなぐ助詞です。「さくら大学の学生」という句は、a student at Sakura University という意味を表します。2 つ目の「学生」という名詞が句の中心的な概念<sup>4</sup> (学生であること) を示し、1 つ目の名詞「さくら大学」がそれにより細かい記述 (高校ではなく、大学の学生であること) を与えています。「の」を英語の Takeshi's のような所有格のように使うこともできます。下の 1 つ目の例がそれです。下に 2 つの名詞の間に「の」が現れる例をいくつか示しました。句の中心的な概念は、どれも名詞<sub>2</sub>が表しています。そして名詞<sub>1</sub>が制限や修飾などを表しています。



たけしさんの 電話番号  
大学の 先生  
日本語の 学生  
日本の 大学

「名詞<sub>1</sub>の名詞<sub>2</sub>」という形の句は大きな名詞のように振る舞います。次の例のように、名詞が置ける場所ならどこにでも、「名詞<sub>1</sub>の名詞<sub>2</sub>」を置くことができます。

たけしさんの お母さん    は    高校の 先生    です。

## 脚注

- 1 つまり、ひらがなの「は」は、2通りの発音があることになります。主題の位置では「wa」と発音しますが、他のほとんどの位置では「ha」と発音します。例外として、「こんにちは」や「こんばんは」があります。これらの語は「wa」と発音されますが、ひらがなの「は」を使って書きます。
- 2 日本語では、疑問文の最後に疑問符を書くことは一般的ではありません。
- 3 英語の **what** にあたる日本語の疑問詞には「なん」と「なに」という2通りの発音があります。「なん」は「です」の直前や「～時」のような助数詞の前で使われます。もう1つの「なに」のほうは助詞のすぐ前で使われます。「なに」は、また、国籍を問う「何人(なにじん)」のような組み合わせでも使われます。
- 4 「中心的な概念」というのは、次のような意味です。「たけしさんの電話番号」という句の中では、「電話番号」という名詞が中心的な概念です。「たけしさんの電話番号」というのは「電話番号」の1つだからです。もう1つの名詞「たけしさん」は中心的な概念ではありません。なぜなら、「たけしさんの電話番号」は「たけしさん」という人ではないからです。

## 文法 第13課

### 1 可能動詞 Potential Verbs (p. 26)

何かが「できる」とか何かを「する能力がある」、あるいは何かが「可能だ」ということを表すために可能動詞を使います。

私は日本語が話せます。

私は泳げないんです。

雨が降ったので、海に行けませんでした。

可能動詞は次の規則に従って作ります。

#### 可能動詞 (Potential verb)

- ・ *ru* 動詞： 最後の *ru* を取って *rareru* を付ける  
見る (*mi-ru*) → 見られる (*mi-rare-ru*)
- ・ *u* 動詞： 最後の *u* を取って *eru* を付ける  
行く (*ik-u*) → 行ける (*ik-eru*)      作る → 作れる  
話す → 話せる      泳ぐ → 泳げる  
待つ → 待てる      遊ぶ → 遊べる  
死ぬ → 死ねる      買う → 買える  
読む → 読める
- ・ 不規則動詞：  
くる → こられる      する → できる

*u* 動詞の活用については、五十音図に沿って考えることができます。

	行	話	待	死	読	作	泳	遊	買	
否定	か	さ	た	な	ま	ら	が	ば	わ	～ない
語幹	き	し	ち	に	み	り	ぎ	び	い	～ます
肯定	く	す	つ	ぬ	む	る	ぐ	ぶ	う	=辞書形
可能	け	せ	て	ね	め	れ	げ	べ	え	～る

*ru* 動詞の可能動詞は、*u* 動詞の可能動詞よりも長くなります。(例えば、「見る」の可能動詞の「見られる」と「乗る」の可能動詞の「乗れる」を比べてみてください。) 実は、*ru* 動詞と不規則動詞の「来る」に関しては、「られる」の代わりに「れる」という接尾辞を使ったもっと短い別の可能動詞があります。この「ら」抜き形は、以前は標準的ではないと考えられていましたが、今ではほとんどの人がためらいなく使っています。<sup>1</sup>

ら付きとら抜き		可能動詞	ら抜き可能動詞
<i>ru</i> 動詞：	出る	→ 出 <u>ら</u> れる	出れる
	見る	→ 見 <u>ら</u> れる	見れる
不規則動詞：	くる	→ こ <u>ら</u> れる	これる

可能動詞自体は、規則的な *ru* 動詞として活用します。下の表に可能動詞の活用パターンをまとめました。

可能動詞の活用				
例 書ける	短形		長形	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形
[現在]	書 <u>け</u> る	書 <u>け</u> ない	書 <u>け</u> ます	書 <u>け</u> ません
[過去]	書 <u>け</u> た	書 <u>け</u> な <u>か</u> った	書 <u>け</u> ました	書 <u>け</u> な <u>か</u> りました
[テ形]	書 <u>け</u> て			

助詞「を」を取る動詞が可能動詞になった時には、冒頭の1つ目の例文のように、助詞は「を」も「が」も可能になります。「する」の可能動詞「できる」は特別で、ほとんどの場合「が」が使われます。「を」以外の助詞は、可能動詞になってもそのまま使われます。

可能文の助詞	
・動詞が「を」を取る場合：	
漢字 <u>を</u> 読む	→ 漢字 <u>が</u> 読める / 漢字 <u>を</u> 読める
・する—できる：	
仕事 <u>を</u> する	→ 仕事 <u>が</u> できる (「仕事 <u>を</u> できる」はあまり使われない)
・「を」以外の助詞を取る動詞：	
山 <u>に</u> 登る	→ 山 <u>に</u> 登れる (助詞は変化なし)

可能の意味は、動詞の辞書形+「ことができる」という、もっと複雑な構造によって表すこともできます。<sup>2</sup>

- メアリーさんはギターを弾くことができます。(比較：ギターが弾けます)  
 このアパートでは犬を飼うできません。(比較：犬が飼えません)

## 2 ~し (p. 28)

第9課で学んだように、何かの理由を示す時は、接続助詞に「から」を用います。

日本語はおもしろいから、日本語の授業が大好きです。

1つだけでなく2つ以上理由を挙げたい場合には、「から」の代わりに「し」を使います。「し」は、普通、短形の述語に後続します。<sup>3</sup>

(理由1) し、(理由2) し、(状況)。

日本語はおもしろいし、先生はいいし、私は日本語の授業が大好きです。

A：国に帰りたいですか。

B：いいえ、日本の生活は楽しいし、いい友だちがいるし、帰りたくないです。

「し」を一回だけ使うと、何か他にも理由があるという意味合いになります。

物価が安いし、この町の生活は楽です。(= 一つ理由を挙げるとすれば、)

「し」節を別の文にして、その前に述べた状況について理由を説明するということもできます。

山下先生はいい先生です。教えるのが上手だし、親切だし。

「し」の前にナ形容詞や名詞が使われる場合には、現在形では「だ」が使われることに注意してください。イ形容詞の場合は「だ」は現れません。

イ形容詞：	おもしろいし	(×おもしろいだし)
ナ形容詞：	好きだし	(×好きし)
名詞+です：	学生だし	(×学生し)

### 3 ～そうです (印象 It looks like ...) (p. 29)

イ形容詞／ナ形容詞の語幹に「そうです」を付けて、そのような性質を持つように見受けられる、といった意味を表します。<sup>4</sup>「そうです」文は、印象をもとに推測しているという意味です。

このりんごはおいしそうです。

あしたは天気がよさそうです。

メアリーさんは元気そうでした。

「～そうです」文を作るためには、イ形容詞の場合は最後の「い」を、ナ形容詞の場合は最後の「な」を落とします。唯一の例外として「いい」というイ形容詞は、「そう」の前で「よさ」に変わります。

イ形容詞：	おいしい	→	おいしそうです
(例外)	いい	→	よさそうです
ナ形容詞：	元気(な)	→	元気そうです

「そうです」は形容詞の否定形とともに使うこともできます。「そう」の前では、否定の語尾「ない」が「なさ」に変わります。<sup>5</sup>

この本は難しくなさそうです。

ソラさんはテニスが上手じゃなさそうです。

形容詞＋「そう」の組み合わせを名詞修飾に使うこともできます。「そう」はナ形容詞なので、名詞の前では「そんな」という形になります。

暖かそんなセーターを着ています。

多くの場合、「そうです」文は、目で見えた印象をもとに想像するという意味になりますが、「そう」が視覚だけと結びついていると考えるのは間違いです。「そうです」というのは、決定的な証拠がない場合に使われるのだと言うことができます。(例えば、りんごが「おいしそう」と言えるのは、まだ食べていない間だけです。もし食べてしまったら、実際においしいかどうかを断定的に述べることができってしまうからです。)また、視覚的な証拠が必要な形容詞、例えば「きれいな」場合には、見た目がきれいだという時に「きれいそうです」ということはできません。もしそれを見ることができるのであれば、もう十分きれいかどうかの判断ができってしまうからです。

#### 4 ～てみる (p. 30)

動詞のテ形と助動詞「みる」を使って、何かを試しにやる、何かをやってみる、という意味を表すことができます。自分の行動の結果がどのようなものになるか自信はないけれど、やる勇気があって、どのような結果になるかを知りたいという時に使います。

漢字がわからなかったので、日本人の友だちに聞いてみました。

A：この本、おもしろかったですよ。

B：じゃあ、読んでみます。

「みる」は動詞の「見る」から来ていて、規則的な *ru* 動詞として活用します。主動詞の「見る」と異なり、「てみる」はいつもひらがなで書かれます。

#### 5 なら (p. 31)

「X (名詞) なら Y (述語)」という形で、述語 Y が名詞 X だけに当てはまること、つまり、もっと広く当てはまるわけではないということを表すことができます。「なら」文の中心的な意味は、言ってみれば、対比 (下の例文の状況 1) や限定 (状況 2) です。

状況 1

A : ブラジルに行ったことがありますか。

B : チリなら行ったがありますが、ブラジルは行ったことはありません。<sup>6</sup>

状況 2

A : 日本語が読めますか。

B : ひらがななら読めます。

「なら」は、それが付いた名詞について何か肯定的なことを言う時に使われます。上の最初の例では、「なら」はチリを肯定的に取り上げて、もともとの質問に出てきたブラジルと対比させています。2 つ目の状況では、ひらがなという小さな限定的な部分が、より大きな部分、つまり言語全体と対比されています。

## 6 一週間に三回 (p. 31)

ある時間の枠の中で、どのような頻度で起こるか／するかを表現するために次のような言い方をすることができます。

(時間の枠) に (頻度)

Q : 一週間に何回髪を洗いますか。

A : 私は一週間に三回髪を洗います。

一日に三時間ぐらいゲームをします。

一か月に三日か四日、アルバイトをします。

脚注

- 1 ら抜き<sup>1</sup>の形はいまだに学校文法ではよいとされていません。文法やつづりをチェックするアプリケーションでは、依然として、ら抜き言葉に関して書き換えが勧められます。
- 2 「を」を取る動詞が「ことができる」構文の中に現れた場合には、可能動詞とは異なり、もともとの助詞「を」がそのまま保たれます。
- 3 とても丁寧な話し方の場合には、「し」は長い形に続くこともあります。  
私は来年も日本語を勉強します。日本語が好きですし、日本語はおもしろいですし。
- 4 「そうです」を動詞の語幹に付けて、印象や想像を述べることもできます。



このセーターは家で洗えそうです。（「洗う」の可能動詞「洗える」）  
何かがもうすぐ起きそうだという印象を述べる時にも使えます。

雨が降りそうです。

- 5 別の方法として、「そう」の前の形容詞を否定するのではなく、「そうです」の否定形を使うこともできます。

この本は難しそうじゃないです。

ソラさんはテニスが上手そうじゃないです。

- 6 この例では、「なら」の前に助詞「に」を残して、「チリになら」と言うことも可能です。「に」「で」「から」のような助詞は、「なら」の前に残しても消してもかまいません。「は」「が」「を」は「なら」とは共起しません。